

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月25日現在

機関番号：33927

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K06411

研究課題名(和文) 中世フィレンツェにおける塔状住居の様態と政治体制との関わりに関する研究

研究課題名(英文) casa-torre and the conflicts between its society and the commune in medieval Florence

研究代表者

石川 清 (Ishikawa, Kiyoshi)

愛知産業大学・造形学部・教授(移行)

研究者番号：40193271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：1172年に建設された都市壁の中を数多くの塔状住居が占拠していた。11世紀後半にはフィレンツェ政府は都市の周辺領域から税の徴収を開始し、法的規制の緩和策によって周辺領主たちを都市内に移住させた。移住した周辺領主たちは、複数の塔を隣接させて組織的編成して集住することで、都市外からも都市内からも自らを防御する体制を維持しつつ都市内での影響力を確保しようとした。本研究では、中世フィレンツェの塔状住居の様態とその発展・衰微の過程を把握するとともに、その後の都市邸館(パラッツォ)の住居形式に与えた影響を、都市国家フィレンツェの支配体制・都市整備との関連において明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

13世紀は、都市フィレンツェのコムーネが貴族の支配と彼らの軍事的共同体から公的権威をもつ中立の制度国家へと変化していく闘争の世紀であった。都市周辺から都市内に移住した人々が都市内抗争の防備のために建設したのが塔状住居であり、その軍事的共同体を組織した。それらは都市内の市民に脅威を与えていた。初めて市民層によって形成されたボーボロ政府は、それらの脅威を減少させることに努力し、その抗争の中で多くの塔状住居群は倒壊され、あるいはその用途を変質していった。その様態を建築史的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study addresses the topic of the tower called casa-torre of medieval Florence during the twelfth and thirteenth centuries. It examines how they were constructed and organized. The towers became the target of the new government, the Primo Popolo, because they were seen as a threat to civic stability. Research on this subject reveals that were not the sole source of civic chaos and disorder, but instead they were a key element of the communal social order. The towers played important role in managing the early commune. The towers provided security, protection, and social order in Florence. The Primo Popolo began to destroy the towers. Though they may not exercise military power, they still exemplified personal power and therefore were highly valued by magnate and merchant families alike. Finally the towers, though transformed in their uses, were guaranteed a space in the city because they were still seen exemplified power.

研究分野：建築史

キーワード：中世 イタリア フィレンツェ 塔状住居 建築史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

13世紀に塔状住居を建設した門閥を研究する歴史家 Carol Lansing (*The Florentine Magnates: Lineage and Faction in a Medieval Commune*, Princeton University Press, 1991)、Marvin Becker (*A Study in Political Failure: The Florentine Magnates(1280-1343)*, *Medieval Studies*, 27(1965), pp.246-308)、Jacque Heer (*Parties and Political Life in Medieval Life in the Medieval West*, New York, 1977)は、塔状住居を建設した門閥が必ずしも周辺貴族 magnates だけではなく多様性を秘めており、19世紀の社会主義者 Salvemini が提起した社会モデルとは合致するものではなく、利害の一致、防御、同胞、血族、近隣への忠誠などといった多様な自己認識のもとに結束していたという見解を打ち出した。塔状住居群は中世社会に混乱をもたらしたが、初期の都市コムーネ形成には正統に機能し、塔はポラーニによって強制的に取り壊されたのではなく、社会変革の中で重要な役割を終えて衰退し、本来の伝統的機能を失いながらも残存し続けたと考えられる。

ローマ時代市壁の四隅には攻撃・防御用の塔があり、都市を縮小したビザンティン期の四隅の塔の一つは、13世紀に牢獄として用いられたパリアツァ Pagliazza で、現在ではホテル・ブルネレスキとしてコンバージョンされ、再利用されている。もともと多様な機能で用いられており、住居として用いられる場合には、攻撃・防御用の塔よりは間口がやや広く、壁厚もやや薄く、窓もやや大きくできていた。また、フィレンツェ都市外周辺部では周辺貴族が rocche と呼ばれる要塞や塔を築いていた。一般的にピエトラ・フォルテと呼ばれる砂岩で建設され、地上階(1階)の天井はヴォールト架構され、2階以上は木製の平天井であった。入口が防御上の弱点で、時にはアーチ状の入口もあったが、多くの場合は木製梯子で2階へ直接アプローチした。塔状住居の場合も軍事的塔よりも窓が多く、最上階にはしばしばロジgiaが載っていた。これらの最上階ロジgiaはフィレンツェの典型的なパラツォの先駆けとなった。そのような最上階ロジgiaをもつ優美なパラツォの様子を"palatium sive turrim"と呼ばれたことが当時の記録史料 *Liber Extimationum: Il Libri degli Estini*, edited by Olof Bratto, Acta Universitatis Gothoburgensis, Vol.62:2, 1956, p.114 に残されている。Carol Lansing は、証明は困難ではあるが、塔状住居は要塞化された古代ローマのヴィッラを起源としていると立論した。当初防御が最も重要であったはずの塔状住居の地上階(1階)に入口を設け、時には1階を店舗にレンタルしていたとする。また塔は常時生活するには室内空間が狭く、塔のレンタル契約の事例が居住使用を意図してなく、塔の鍵の所持に関する記述が常時生活していないことを物語っているとした。人口過密の状態にあった13世紀フィレンツェでは塔が一時的な住居としての役割を果たしたのではないかと考えたのである。

このような塔状住居がどのような変容を遂げるのかを建築史学の立場から検討してみたいというのが私の当初の研究スタンスであった。

2. 研究の目的

フィエーゾレから眼下に見下ろすと、フィレンツェの都市景観が中世後期以降の都市形成期にいかにも連続性をもって計画されてきたかを痛感する。しかしながら、現在見ることができる都市景観の中には古代ローマ期やその後の都市停滞期、カロリング期の残存物は極めて少なく、本研究の対象となる12世紀の様子を示すものも僅かしか見ることができない。1490年頃に描かれたフィレンツェ都市図『鎖に囲まれた都市図』Veduta con Catena では、市壁外から都市全体の眺望が描かれ、大聖堂、鐘塔、市庁舎等の公共施設が都市景観を決定し、市民の住居群は低く抑えられている。その一方で、それとは全く異なった印象をもつ、1342年に描かれたピガッロの<慈悲の聖母>フレスコ画には、1172年に建設された都市壁の中を多くの塔状住居が占拠している様子が描かれている。おそらくそこに描かれた都市の様子が本研究対象の12世紀の状況に最も近い描画であろう。建設中のサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂やジョットの鐘塔、パラツォ・シニョリーア(市庁舎)という公共的権勢とともに、私的な<家>の権威としての塔が林立している。

都市は11世紀初め頃から物資の交換の中心地としての役割を再びもち始め、市場経済が再興され、新たな商工階級が形成された。そして封建領主層と、商業の繁栄とともに台頭してきた上流商工階級と結びつきながら都市貴族社会を形成して、都市自治権を獲得し、都市コムーネを形成した。11世紀後半にはフィレンツェ政府は、周辺領域 contado から税の徴収を開始し、12世紀初めには都市外の支配を本格化している。フィレンツェ政府の目的は、徴税することによって伝統的にフィレンツェ司教の権威下にあった領土を支配することであり、同時に法的規制の緩和策を施すことによって周辺領主たちを都市内に移住させ、それを達成しようとした。その結果、コンタード(都市周辺領域)に土地を所有する周辺領主の大部分は都市に移動・集住し、そこは政治権力を握ろうとする様々な貴族の派閥間の争いの場となった。この中で、防御と攻撃のための塔をもつという、コンタードにおける封建制の習慣もそのまま都市に移植された。

都市内に移住した周辺領主 magnate たちは、コンタードの生活・文化を都市内に移し替えた。権力を誇示するために rocche と称する城塞・要塞に住んでいた周辺領主たちは、複数の塔を隣接させて組織的に編成して集住することで、都市内での影響力を確保し、拡大しようとした。一般的に門閥 consorterie と呼ばれている複数の塔を組織的に編成した集住は、中世トスカナ地方に現出した都市国家において都市外からも都市内からも自らを防御する装置として維持された。周辺領主たちの家族は、防備を固めた間口の狭い塔状住居に住み、血縁関係にある家族同士が共同体を形成して隣接する塔群に集住する形式をとった。共同体は、本来は血縁関係によって結ばれていたが、後にはいくつかの<家>間で同盟が結ばれ、これらの連合体は、市民と都市コムーネとの間の中間的立場として機能した。逆の言い方をすれば、都市コムーネがいまだ公共権が発揮できない状況であったと言える。各塔状住居は塔の外部にある木製の張り出し通廊 ballatoio によって水平に連結され、非常時には街

路に面しない内側に巡らされた張り出し通廊を伝って容易に他の塔に移動することができ、塔状住居の集合体は、全体として一つの要塞として機能した。

このような塔状住居群は、都市内抗争を通しての周辺領主 *magnate* たちの衰退、商人階級の台頭、つまり都市国家の支配体制の確立とともに衰微していくわけであるが、のちの中世後期・ルネサンス期に確立するパラッツォという居住形式に少なからず影響を与えている。都市邸館を意味するパラッツォは、外観において私的な「家」の権威を象徴するとともに、その内部においては集住を可能にする個人居住区画が芽生えはじめており、塔状住居はそれらの礎を築いた点において極めて重要である。その経緯、過程を明らかにすることは、住居史全体の発展過程を把握する上で非常に重要であると考えた。本研究では、中世フィレンツェの塔状住居の様態とその発展・衰微の過程を把握するとともに、その後の都市邸館の居住形式に与えた影響を、都市国家フィレンツェの支配体制・都市整備との関連において明らかにすることを目的とする。

塔状住居 *casa-torre* に関する既往研究は非常に数が限られている。しかし、塔状住居は決して孤立した事象ではなく、封建主義、周辺貴族、商人階級の台頭、貴族と市民との抗争、派閥争い、新皇帝派と親教皇派の抗争、建築デザインと都市計画、プリモ・ポーポロ、最終的な独裁者の勝利などの中世フィレンツェの政治と相互に深く関連している。19世紀末に中世フィレンツェを理解する上で重要な3人の歴史家 *Pietro Santini*, *Robert Davidsohn*, *Gaetano Salvemini* による重要な著作と、現代の調査研究にとどまる。1887年に発表された *Pietro Santini* (*Societa delle torri in Firenze, Archivio Storico Italiano*, Firenze, 1887, pp.25-58 & pp.178-204) の論考以上に優れた研究は見当たらない。*Santini* はこの論考を最初に出し、1889年には *Documenti dell'Antica Costruzione del Comune di Firenze* と題する膨大な史料を出版している。その7年後に *Robert Davidsohn* は、1927年に4巻全巻が完結する *Geschichte von Florenz* の第1巻を出版する。彼は特に塔状住居に多くの紙面を割いているわけではないが、フィレンツェ全史に渡って重要な示唆を残している。また、*Gaetano Salvemini* は、1899年に *Magnati e Popolani in Firenze dal 1280 al 1295* という著作を出版し、特に周辺領主 (*magnate*) と *Popolani* の抗争に関しては、大いに論争の余地が残されている。

近年の塔状住居研究においては、*Lara Mercanti*, *Giovanni Straffi*, *Le torri di Firenze e del suo territorio*, Firenze 2003; *Fortunato Grimaldi*, *Le "case-torri" di Firenze, Edizioni Tassinari*, Firenze 2005; *Fanelli, G.*, *Firenze architettura e città*, Firenze, 1973, pp.30-34; *Macci, L. e Orgera, V.*, *Architettura e Civiltà delle Torri*, Firenze, 1994, があるが、現存する建築物の解説にとどまっている。

3. 研究の方法

本研究は文化史・法制史・社会史に及び領域横断的建築史研究である。本研究の方法としては、a) 実地調査、b) 原史料調査、c) 二次資料研究を3本の柱として、調査項目下記9項目を複合的・複層的に年次に沿って解明していく計画であった。その項目は、1) 塔状住居の取り壊し・衰退に関する建築史的考察(実地調査・原史料調査含む)、2) 13世紀末の史料に記録された塔状住居(原史料調査)、3) 塔状住居に見る彫刻部分の考察(実地調査)、4) 塔に関わる共同体の契約と習慣(二次資料研究)、5) 塔状住居の目的と形式、6) 私的記録に残された塔に関わる共同体(原史料調査)、7) 都市周辺領域における塔に関わる共同体(原史料調査含む)、8) 塔に関わる共同体とフィレンツェ政府の成立との関係、9) 中世末期の擬似パラッツォと公共建築における木製張り出し回廊(実地調査含む)、であった。大幅に修正を強いられたのは実施調査であった。かつて存在したことを示す史料がある塔状住居は175存在することが明らかになっているが、現在も住み続けている塔状住居すべてを網羅的に実施調査するのは無論不可能ではあるが、フィレンツェ大学留学時代にコネクションをもった幾つかの塔状住居を詳細に調査しても往時の相貌を浮き彫りにすることはできなかった。3年という短期間と限られた調査費による、しかも壁面表面だけの調査からでは深層に入り込むことはできず、ハードからのアプローチは早々に断念せざるを得なかった。制約があったものの、若干の実地調査と、既往文献の読み込み、資料の解説を行うことで目的は達成できたと考える。

4. 研究成果

中世イタリアの都市国家は実質的な上位権力をほとんど持つことがなかった。教皇権と皇帝権に形式的に服しつつも、都市が上位権力の直接的な制限を受けることなく自治を行い、周辺領域を支配した。そして、そのために独特の政治制度が編み出された。都市民は11世紀半頃から都市内の平和と秩序維持のために *コムーネ comune* (政治共同体) を組織し、一般に *コンソリ consoli* などと呼ばれる複数の代表が *コムーネ* の秩序維持を担ったが、*コンタード* や周辺農村の封建領主層なども都市に居住するようになると、*コンソリ* 制は多様な出自の都市民の間で激化した党派争いに対応できなくなる。そのため、*ポDESTA podesta* と呼ばれる1名の役職者に市政全般を一定期間委任する制度が広まる。都市内の利害関係からの中立を保つために、他都市出身者で主に法学を修めた騎士身分の者が招喚された。*ポDESTA* はのちにもっぱら司法を司ることになるが、形式上は *コムーネ* 権力を委託された *コムーネ* の公的代表者であった。その後12世紀末頃から都市の経済活動の発展によって力を得た商人や手工業者たちが自らの共同体 *ポーポロ popolo* を組織し、*アルテ arte* (同業組合) と共に、13世紀半頃には *コムーネ* の主導権を握るようになった。*ポーポロ* の代表者 *カピターノ・デル・ポーポロ capitano del popolo* は、*ポDESTA* と同じく、他都市出身者が就任した。このように都市の権力構造は多元的で併存的で、新旧様々な組織が共存し、複雑な様相を呈していた。しかしながら、14世紀には、市内や支配領域で生じる深刻な政治危機に際し、都市の全権を一時的に *シニョーレ* と呼ばれる一人の人物の手に委ねる制度 (*シニョリーア*) が広まった。*シニョーレ* の中にはその制度を利用して、*ミラノ* の *ヴィスコンテ*

イ家のように都市支配の実権を握って都市を支配する君主も出現した。地理的結合力の強い都市が都市同士の同盟や支配関係を介して一定の地域統合を達成したものの、王権等の上位権力の不在から生じる党派抗争を抑制して、都市内の平和を実現し、安定した広域支配を実現するためには、豪腕のシニョーレが、そうでなければフィレンツェのような強力な支配体制が必要とされたのである。フィレンツェは、トスカナ地方の他都市と同じく、13世紀前半にコンソリ制からポデスタ制に移行し、さらに13世紀後半以降のポーポロの台頭と市政掌握によって、カピターノ・デル・ポーポロ職が創設された。ポーポロの主体となった商人や手工業者が組織するアルテは、13世紀末までに政治的軍事的機能も併せ持った21の公認アルテに再編され、1282年にはこれらのアルテのメンバーの中から居住地区ごとに選ばれた代表者プリオーリ *priori* が市政の中心的担い手となり、都市政治制度の基盤が構築された。特に7大アルテのメンバーが大きな発言権を持った。さらに1293年には「正義の規定」*ordinamenti di giustizia* と呼ばれる都市法の制定によって、主要な役職者の就任資格をアルテの成員に限るとともに、主に旧支配層のコンソリ貴族や周辺地域の封建領主層など、体制に反抗的な者たちをマニャーテ *magnate* (豪族) と断じ、彼らの政治参加権に大幅な制限を加えた。グエルフィ党派(教皇派)とギベリーニ党派(皇帝派)に分かれて抗争したエリート層は、1280-90年代には、ポーポロ政府によりその大部分がマニャーテ(豪族)と見なされ、公職から締め出されることとなった。彼らが塔状住居を所有し、塔共同体を組織していた都市階層であった。都市の政治的役職者たちは複雑化した組織の中で、厳正な審査とくじ引きの組み合わせによって選出され、特定の家系や個人に権力が集中することを避けた。

13世紀から14世紀前半までのエリート層とポーポロの社会的位置づけと階層間の抗争について論じた Najemy は、当時の史料ではポーポロとは非エリート市民を指すことが多いが、有力家門であると見なすには、財力、家柄や公職に代々選出されるだけでは不十分であり、パトロネージ関係を多く有していることも不可欠であったことを指摘している(John M. Najemy, *A History of Florence: 1200-1575*, Malden, Blackwell, 2006)。Ottokar の考えでは、プロソポグラフィの成果に基づいて、13世紀の支配層に関して、ポーポロがエリートの一派であるという(N. Ottokar, *Il comune di Firenze alla fine del Duecento*, 2ed., riveduta e corretta, Torino, 1962)。一方、Salvemini の説では、豪族は大土地所有者であり、ポポラーニは商人であるといった経済的基盤の相違が豪族とポポラーニの違いであるとする(G. Salvemini, *Magnati e popolani in Firenze del 1280 al 1295*, 2ed., a cura di E. Sestan, Milano, 1966)。こうしたポーポロの用語の混乱は、社会的地位が法によって、定められたものでなかったことによる。そのため、個人や家族がどの階層に属していたのかということの判別するのが難しい。そこで、Najemy は、Ottokar と Salvemini の古典的な論争を踏まえ、エリート層とポーポロを検討する。Najemy は、基本的には Ottokar の説に頼りながらも、豪族が一つの階層ではなく、エリート層とポーポロの経済活動・利害関係は共通であるとする。その上で、Ottokar などがポーポロを十分に検討していないとして、ポーポロの政治文化の中心であるアルテを取り上げる。その中で、コムーネとアルテとが理論的・構造的に類似しており、それゆえアルテがコムーネ政府で中心的な役割をもつという認識が同時代の人々に広がり、13世紀後半には、アルテが政治の中心的な組織になったと指摘する。1250年にエリート層を抑え、政治権力を得たポーポロは、プリモ・ポーポロ政府を成立させたが、こうした流れから成立したセコンド・ポーポロ政府は、1293年の都市法「正義の規定」を公布し、門閥を有するようなエリート系族をマニャーテとみなし、公職から締め出した。この都市法成立の背景には、非エリート層の広範な連合が、エリートを豪族と非豪族に分裂させ、彼らに抗したことが指摘されている。

塔状住居の実際の使用様態に関しては、著名な年代記者 Giovanni Villani の年代記(Book V, Chap.9)にも記述があり、また、特に当時の年代記者 Dino Compagni (*Dino Compagni's Chronicle of Florence*, University of Pennsylvania, 1995, Book I, Chap.4 p.8)は、政治執行部である6人のプリオーリ、6人の執事、6人の警備官たちが2ヶ月の間バディーア修道院の la Castagna と称する狭い塔に攻撃から身を守るために閉じこもったことを記している。これは塔が非常時の仮の居住の場になったことを物語っている。また、最も古い記録であるが、1178年に15、16家族が1つの塔を建てることに合意していること、1180年の別の記録では少なくとも7つの異なった姓をもつ30人の家長が2つの塔の建設のために働いたことも明らかになっている。Heer は、塔に関わる共同体は血族がその起源であると主張したが、Lansing は、塔の契約の存在から初めから血縁とは無縁であったと主張した。塔に関わる共同体に関する記録の中には、1)自分の家族、妻の家族、四親等までしか親族を守る必要がないこと、2)親族との争いを禁止していること、があることから様々な家族が混成している可能性が高いと主張した。このことから Lansing は、塔共同体は血縁集団ではなく、同一の目的を持った家系と結論づけた。

塔に関わる共同体の契約では、戦う必要はなく同胞を保護すること、支払いの義務は子供も引き継ぐこと、付属の塔や新塔を建設する際には近隣の塔より高くすること、建設費は平等にシェアすること、張り出し回廊や入口の場所は協議することなど、が記されている。上記既往研究を踏まえて、これらの張り出し回廊が軍事的だけでなく、生活上の実質的な機能として必要であった。塔に関わる共同体の重要な関心事の一つは、隣の塔と合体して拡大を目指すことにあった。塔に関わる共同体の契約の中には、非常に強力な忠誠心を示すものがある。明らかに近隣に強大な<家>があり、Sinding によれば、その背景にはグエルフィ党派(教皇党派)とギベリーニ党派(皇帝党派)の抗争があるという。

1248年にグエルフィ党派はフィレンツェを放棄し、ギベリーニ党派がフィレンツェ都市全体を制圧したとき、ギベリーニ党派は、逃亡したグエルフィの塔状住居群を徹底的に破壊した。この塔状住居の破壊は深刻な事件ではあったが、それ以上に重要なことは、彼らが都市を超えて塔状住居の影響力を決定的に弱体化させてしまったことに気づいていなかった点にある。ギベリーニ党派のマニャーテは自らの権力がグエルフィ党派、ギベリーニ党派に限らず、全てのマニャーテの権力の集結であり、彼らの

膨大な塔状住居群とその共同体の中に存在していたことを理解していなかった。軍事的共同体の覇権はそれら全ての集積であり、したがってこれらの片割れの塔の崩壊は、彼らの覇権も脆弱であることを自ら証明してしまったことになる。敵はむしろ都市内の他の新興勢力であり、党派マニャーテ同士が争っている場合ではなかった。1258年にギベリーニ党派がフィレンツェ都市内から逃亡したとき、ゲルフィ党派の報復により問題はさらに悪化した。塔共同体の影響力を弱体化させる大アルテの試みが開始されていた。大アルテは、ゲルフィ党派の、後にはギベリーニ党派の破壊された建物の除去をプリモ・ポーポロや「正義の規定」以上に積極的に執り行った。破壊されなかった塔状住居においても、報復がおさまるまでそれぞれの塔状住居に退却していた住民は、結局フィレンツェからそれぞれが親交のある都市に避難、撤退しはじめた。塔状住居はいまや軍事的には無用なものとなった。彼らは塔状住居を放棄して都市から逃亡することで、都市内で力を効果的に表現する塔を失ってしまった。結局、塔は対抗勢力の力を監視することも防衛することもできなかった。

ではなぜゲルフィ党派もギベリーニ党派も塔状住居を放棄して他都市に逃亡したのであろうか。塔状住居は都市内に留まっている限りにおいては軍事的にも政治的にも効果的な資産ではあった。それぞれの塔共同体は対抗する共同体が防衛を突破できないように近隣を固めていた。都市内の勢力が均衡している限り、塔共同体は相互に監視し合い、ある種の公的調和は保たれていたが、都市外に拡大する同盟システムが出現すると、塔共同体はその対抗勢力から軍事を削ぎ落とすために軍事を補強してくれる同盟下にある外部勢力にアクセスした。塔状住居群は、塔を攻撃するに足る人員を確保ができない都市内の対抗勢力の攻撃には対抗できても、それを上回る都市外の軍事的加勢があれば、長期攻囲に対抗するには不適當であった。ギベリーニ党派の同盟であるアンティオキアのフリードリヒが加勢のためにフィレンツェに向かう途上であることを、ゲルフィ党派は事前を知り、1248年に他都市に逃亡し、ギベリーニ党派が勝利をおさめた。このように軍事同盟関係の有無で、都市外に逃亡し、コンタードの要塞や親交のある都市へ避難せざるを得ないという事態は、まさに塔が軍事的には意味がないことを露呈してしまっている。彼らはそれぞれ同盟関係及び避難する親交都市を確認する必要に迫られた。塔や要塞は都市内から完全に消滅したわけではなく、未だその機能は失ってはいなかったが、都市内においてその家系の権力を表現する第一のものではなくなった。より広範な同盟関係を模索することは、他都市やその勢力にフィレンツェの内部抗争に介入する機会を与えることになり、かえって都市内の立場を複雑化させた。塔共同体だけが同盟が可能な、より上位の軍事を求めたわけではなかったが、1260年のモンタペルティの戦いにおけるギベリーニ党派の勝利は、シチリア王マンフレディの援護なしには成し遂げられなかった。塔はもはや権力の単なるシンボルとなっていたが、コムネ共同体はゲルフィ党派やギベリーニ党派が可能にした政治的軍事的共同体の強みを理解していた。塔の機能は変化したが、その共同体はコムネ政府の権力を視覚的に効果的に表現する組織をいまだに代表していた。

塔共同体という脆弱な同盟の挫折は、コムネを支配する共同体にポポラーニを成長させ、マニャーテ層の覇権を弱めた。1250年にフィリーネにおいてゲルフィ党派がギベリーニ党派に勝利し、その年にフリードリヒ2世が逝去したことによって、フィレンツェ都市民は自らの権力を掴み取る機会を得た。ギベリーニ党派の敗北と先頭に立つゲルフィ党派の貴族家系の欠如というフィレンツェ内にできた権力の空白状態をポポラーニは利用した。このことからプリモ・ポーポロが中世世界に誕生した最初の民主主義的政府であると讃美されることがあるが、それは当たらない。貴族家系とその共同体の一時的な弱体のもとで政府の正式な代表者にアルテが選出されたというポーポロ・グラッシの勝利を単に示しているに過ぎない。ポーポロがまず直面したのは富裕な商人層の台頭に脅威を感じていた貴族層の抵抗であった。ポーポロは内部抗争を制圧できる都市民の軍事を構築しようとした。1250-60年代のポーポロの多くは裕福で、その40年後にはマニャーテとみなされた家系もあった。塔共同体の抑制の利かない抗争を監視することで自分たちを正当化してきたが、マニャーテに浸透していた利己主義がポーポロ・グラッシにも染み込んでいった。いまやポーポロ・グラッシは貴族を攻撃するための近隣軍事同盟を所有するようになる。彼らは塔共同体を根絶せずに塔共同体のような機能を有する軍事共同体を組織した。富裕な商人たちは、マニャーテの権力を弱める「正義の規定」を通過させてすぐに、さらにマニャーテの迫害を目論む項目を削除している。商業アルテとその共同体が重要であるように塔とその軍事的共同体はフィレンツェにとって未だに重要な要素であった。共存しなければ共倒れになる共同体であった。塔は数こそ減少したが、未だに重要な機能を有し、14世紀まで残存していた。ポーポロは塔の重要性とその存在価値を認めていたのである。

ポーポロは自らをPopoloと称するマニャーテではない市民たちによって組織された最初の政府であった。ポーポロは貴族と抗争するために共同体を組織し、マニャーテ層や富裕なアルテを除く、全ての階層に対して開かれていた。1260年から1282年まで一時的に退行を強いられたものの、マニャーテの権力による横暴や破壊的な行為を監視し、都市の秩序を保持しようとした。しかし、皮肉にも実際には中世フィレンツェ史上最も抗争が多発した時期を生み出してしまった。塔を破壊して個人的暴力を抑制した政府の試みは、実際にはフィレンツェ都市内の混乱を招いた。政府さえも多くの共同体の同盟に過ぎなく、塔を破壊したことで、政府を構成していた一つの共同体を解体し、都市内の繊細な均衡を崩してしまった。確かに塔と塔共同体は都市の秩序に対する脅威であるとともに抗争の原因となったが、塔が存在していようがまいが、都市内抗争は中世社会の通常の姿ではなかったのか。しかも実際には塔は基本的に防衛的であり、攻撃には有用ではなかった。塔は軍事的シンボルになり得ても攻撃力はなく、社会的地位を表現しているに過ぎなかった。実際には塔の破壊は危険で予測不能なマニャーテの力を断片化したに過ぎなかった。個々の塔が破壊されたとしても一族の同盟関係にある共同体が破壊されたわけではなかった。かえって彼らを都市外に追い出したことで、塔の防禦力を

上回るさらにダイナミックな攻撃力を用意させることになった。

塔状住居は都市内抗争における防禦には卓越していたが、外部からの巨大軍事勢力の侵攻に対する都市全体やその周辺の防禦には全く対処できなかった。塔状住居群と塔共同体の決定的な欠点はまさにそこであった。塔はもともとコンタードにある *rocche* を模した古い伝統に基づいており、塔状住居群を構成する共同体の主要目的は、マニャーテの出費によって都市内に確固たる力を構築することにあった。都市民にとっては、塔状住居群は市民の平和を脅かし、抗争に貢献するものとして映った。その抗争の根源としての塔状住居群を商人層は消滅させたが、制度を変革して支持を得ることが得策であった。小アルテに属するポポラーニの大多数の支持なしでそれを成し遂げることはできなかった。マニャーテは近隣には権力を行使していたが、都市を離れてしまえば、同盟関係にある他都市とその指導者たちに助力を求める以外になかった。皮肉なことに塔状住居群とその共同体の力を消失させた一番の立役者はそれを願っていたポポラーニではない。自ら塔状住居群を建設し、その共同体を形成していた、グエルフィ党派とギベリーニ党派に所属するマニャーテの抗争こそがポーポロ政府によるいかなる攻撃以上に数多くの塔を破壊したのである。

1250 年はフィレンツェにとって貴族支配の体制から上流商工市民層による民主的な体制への最初の重要な転換点となる。市民によって組織された最初の政府であるプリモ・ポーポロが組織され、塔が貴族たちの象徴であり、市民たちの調和の障害となっている塔を市民の調和を確保するために破壊すべきであるとした。1260 年から 1282 年までに一時的にその気運は後退したものの、1293 年に塔の破壊を容認する「正義の規定」が制定された。しかし、実際には個人的な破壊行為が生じたり、政治的勢力の均衡が失われたりしないように破壊は抑制され、公共的な建築の一部に組み込まれ、変質していったと考える方が妥当である。もともとは私的な塔であったカピターノ・デル・ポーポロのパラッツォに付属する約 100 ブラッチャの高さの塔は、市民の象徴として残し、他の塔は古くからの条例で定められていた実際には守られてこなかった 50 ブラッチャの高さ制限を復活し、その上部の取り壊しを命じた。

歴史家 Robert Davidsohn (*Storia di Firenze*, Vol.1, 1956, p.554)によれば、フィレンツェには 1180 年には 150 本の塔があったという。しかし、13 世紀末には激減し、その一部は公共建築のそれに置き換わった。いまでは塔の名残りは、現在のサンジミニャーノの塔群のように都市のスカイラインを形成することはないが、詳細に観察すれば、1173-75 年に建設された中世第 2 市壁内には塔上部がカットされてはいるものの、塔下部の外観や内部空間の状態はいまでも多くの塔に保持されていた。

13 世紀には都市フィレンツェは、都市の発展を背景に大規模な公共建築の建設とともに都市構造の再編を行った。古代ローマ時代の都市構造を保持しつつも新たな社会的要請に応える公共建築とそれに付属する広場を創出し、都市に複数の中小の核を配置した。それによって単一中心であったローマ都市部と拡張部との境界周辺にそれらの核が双方を転結する目的で設けられることによって、障害となる既存建物を取り壊し再編しながら、新たな都市の全体像の再構成へと結びつけた。既存の都市組織と結びつきながらも新たな統一感ある都市景観の創出が実現したことは、来るべくルネサンス期の文化都市の実現に非常に重要な鍵となった。

また、非常に興味深いことに、ポーポロが建設した最初の大規模な公共建築は、新様式を創造したものではなかった。それどころかプリモ・ポーポロによって 1255-1260 年に建設されたパラッツォ・ポデスタは、粗面仕上げの塔を内包した完全な塔状住居群の模造物であり、この露骨な模倣は、いかに塔状住居群を持っていた含意がポーポロの目標にされたかを証明している。塔共同体と抗争した経験はなかったかも知れないが、都市の新たな構成員も少なくとも塔に対する共通感覚は持ち得ていたであろう。不幸にも後にバルジェッロと言及されるパラッツォ・ポデスタは、1260 年には権力を失い、その意図を遂げることはなかった。そのパラッツォは矩形平面ではなく、立地に妨げられ、プロコンソロ通りに沿って建設され、都市に対してその権威を十分に主張することができなかった。都市の新興勢力が大家系にメッセージを送りたかったならば、都市内の重要な場所に建設すべきであった。

しかし、1299 年に彼らはパラッツォ・シニョリアの建設を計画したときにその機会を得た。1258 年にギベリーニ党派のウベルティ家が破壊され、その敷地は数年間廢墟のままに残されていた。その場所は旧市街地の数少ない空地の一つであった。新しいパラッツォは、*torre della vacca* と呼ばれるフォラボスキの塔の基礎を利用することができた。パラッツォ・シニョリアの塔は単に権力のシンボルとしてではなく、都市政府を保護する防禦的役割を担った。粗面仕上げの塔は軍事的塔そのものであり、迫り出し通廊 *ballatoio* や外壁の小窓は軍事施設としての様相を呈している。プリオーレたちの個室を繋ぐ中庭側の木製回廊は塔状住居群を水平に連結する木製通廊に酷似していた。

パラッツォ・シニョリアの第一中庭回廊はある程度の形式性をもっていたが、その中世的様相はミケロットによって 15 世紀にルネサンス的に改修された。1299 年建設当初の中庭は、近年の中庭壁面修復によって視覚的に再現することをできた。Trachtenberg は第一中庭にはバルコニー、つまり水平移動するための木製の戸外通廊のシステムが 2 層 (一部 3 層) 巡っていたことを明らかにした (Trachtenberg, Marvin, *Archaeology, Merriment, and Murder: The First Cortile of the Palazzo Vecchio and its Transformation in the Late Republic*, *Art Bulletin*, LXXI, 1989, pp.565-609)。1250 年代に政府の最高機関であったカピターノ・デル・ポーポロのために建設されたパラッツォ・ポデスタ (のちにバルジェッロ) も、機能的にパラッツォ・シニョリアの前走建物であったため、おそらく関連性をもって 2 層の木製バルコニー構造物が建物外壁に巡らされたと考えられる。